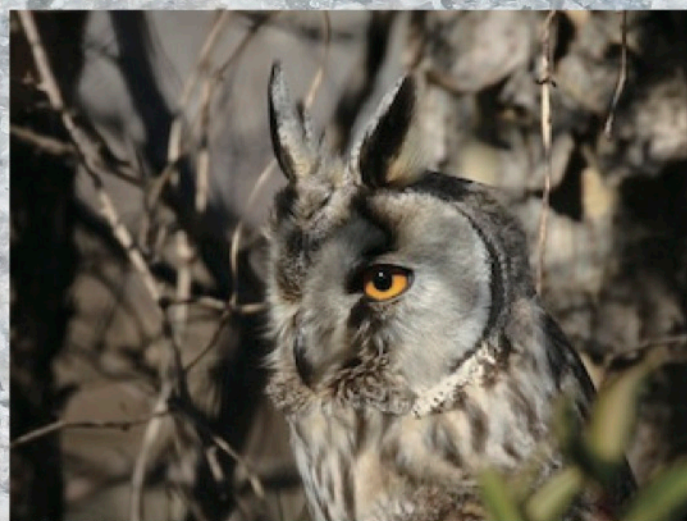


◆ 再来 ◆

当画報のNo.28において『河畔林』を取り上げ、その中の話題として、かつて淀川河川公園の樹木を「トラフズク」が越冬の場所として利用していたけれども、その木が伐採された後はその姿を見なくなった...という文章を書きましたが、何と今冬、再び「トラフズク」が河川公園内で確認されました。

漢字では「虎斑木菟」と書き、羽の模様からその名がついています。本州北部や北海道の平地や低山地の林で繁殖し、冬に温暖な地方へ越冬のために移動してくるフクロウの仲間です。耳のように見える羽角が特徴的ですが、単なる飾り羽で、本来の耳は目の近くにあります。今回確認されたのは、河川公園、散策道やグラウンドに隣接する野草地区の中に点在する樹木で、主にネズミ類や小鳥を餌とする本種にとっては、格好の越冬場となっていたのでしょう。

「トラフズク」を確認したこの日、2時間ほどの間に野鳥だけでもチョウゲンボウ、チュウヒといった猛禽類、ジョウビタキ、ヘニマシコなどの小型の鳥、さらには数種類のカモ類など20種類を超える野鳥を観察することができました。また、周辺は、以前にも紹介している『ヨシ原』や『干潟』など多様な環境が存在しており、野鳥に限らず、小動物や昆虫類などの重要な棲家にもなっています。まさに多様な環境の下には多様な生態系が形成されている場所といえるでしょう。淀川は、人々が散歩やレジャーを楽しむすぐ傍らでも、希少な生き物が棲息する素敵な場所なのです。



環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works
池田 哲哉

水辺の博物誌



大陸生まれの日本育ち

クサガメ *Mauremys reevesii*

淀川水系の緩やかな流れ、水田、ため池などで日光浴をしている姿がよく見られるクサガメ。夏から秋に生まれた体長3cm程度の子ガメは、イシガメと共に「ゼニガメ」と呼ばれ、子どもたちにも大人気。昔から日本に生息している在来種と思われがちですが、実は国内では化石の発見例がなく、江戸時代中期頃に大陸から移入されたと考えられています。皮肉なことに、元々の生息地である韓国や中国では食用や薬用、ペットとして乱獲され、今では保護対象とされています。私たちにとって身近なカメなのですが、ニホンイシガメと共にミシシippアカミミガメに生活の場を奪われ、個体数が減少しているようです。(画/木村理子)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



平成25年5月より隔月で発行してきた当画報は、今回でNo.30となった。特集号の5本を合わせて、35本を発行したことになる。だが、私はこの3月で現役レンジャーを卒業する。そこで、同管内の川嶋レンジャーに白羽の矢を立て、バトンを引き継ぐことにした。彼の頭の中には、みんなが知らない淀川のアレやコレやが渦巻いているようだ。新規コラムも登場することだろう。継続は力なり。淀川水系の生物多様性を伝える淀川自然画報を今後ともよろしく願っています。(編集長 / 石山郁慧)



多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

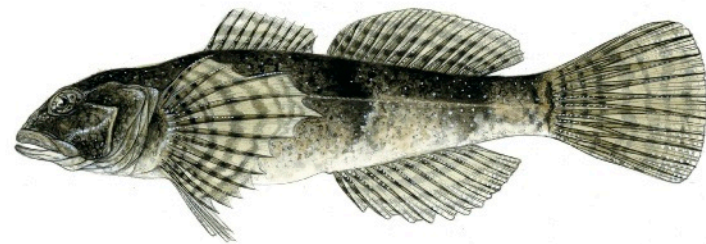
希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カジカ

Cottus pollux

本種はカサゴ目カジカ科のグループに含まれています。日本固有種で、一生を淡水で過ごす河川陸封型の大卵型と、海と川を往々する両側回遊型の中卵型・小卵型に分かれています。分類については、型や別種に分けるなど、諸説があります。北海道南部以南の日本各地に分布していますが、北海道に生息するのは小卵型のみです。

体は、淡褐色から暗褐色まで変化が著しく、全長は最大で15cmになります。大卵型は、イワナやアマゴ・ヤマメなどが生息する河川の上流(渓流)域に、小卵型は中～下流域にみられ、岩、礫などの浮石のある流れのある場所に生息し、水生昆虫や小魚、底生生物などを食べています。産卵期は春～初夏の時期



で、川底にある石の裏側に卵を産み、オス親が孵化するまで卵を守ります。味噌汁や唐揚げ、佃煮など美味で食用にされている地域もあります。環境省レッドリストの絶滅危惧 1B類に指定され、水槽内で飼育するには、冷水器が必要です。また、清潔な環境が必要なため飼育がやや難しく、初心者にはあまりお勧めできません。



よく見ると、カジカにはウロコがない

the waterside

under the water

花想鳥感

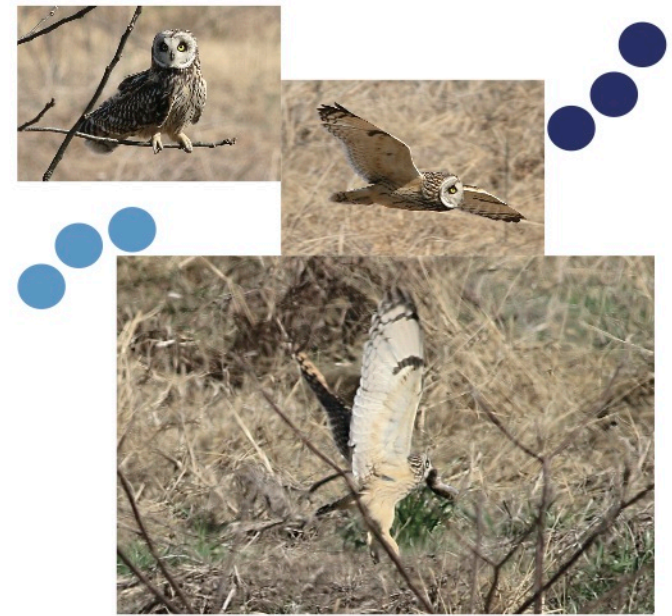
四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

ハタネズミ

一昨年の冬から淀川の水無瀬地区で、たくさんのコミズクが見られるようになりました。この鳥が食べているのがハタネズミ。水無瀬ゴルフ場の閉場により、芝生が雑草原になったため、大発生したようです。ハタネズミはネズミといっても丸顔で、ハツカネズミなどのいわゆるネズミとはずいぶん印象が違います。モグラの穴を利用したり、自らも穴を掘って地下生活をしており、畑の野菜や果樹園の木の根をかじったりするので、農家からはかなり嫌われています。

もともと淀川にはそれなりの数のハタネズミがいたようですが、10年以上もネズミの調査が行われず、ハタネズミがいる痕跡も見られず、もういなくなったんじゃないか、と思っていました。しかし、コミズクがくわえているのは、明らかにハタネズミ。その後、キツネが食べているところも撮影され、確実な証拠となる死体もあり、ハタネズミが大発生していることが明らかになりました。今後、草地は刈り取られなければ徐々に樹林化していくので、ハタネズミの数は減っていくと思われます。人の目にする機会のほとんどない生き物が、いつの間にか増えたり減ったり。「淀川には環境の変化に人知れず適応している生き物がいる」ということを、コミズクの出現によって教えられました。



◆写真提供 / 池田哲哉
コミズクの全長38.5cm、ハタネズミの体長11.0cm、カヤネズミの体長6.5cm。寸法の対比から、写真のコミズクはハタネズミをくわえていると思われる。

the sky & land

水辺の

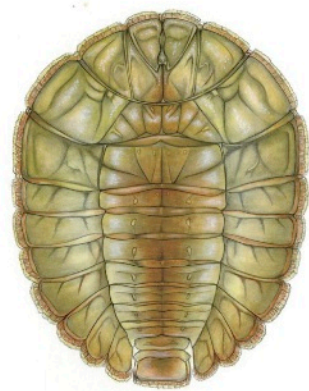
虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

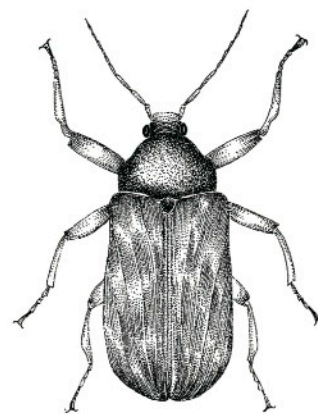
環境省 環境カウンセラー 川島 大助

ヒラタドロムシ

3月の水の中を覗いてみると、大きく成長した水生昆虫の幼虫を見ることができます。水生昆虫の多くは、幼虫生活を終える卒業シーズンです。今回ご紹介するヒラタドロムシも、幼虫期を水中で過ごす水生昆虫です。幼虫は平たい円形・卵型、体長10mm程度、体色は茶褐色です。3対の肢と鰓が腹側にあり、体型は水の抵抗を和らげるような陣笠状です。イギリスでは「水中のベニー銅貨」と呼ばれています。主に流れの緩やかな石の下に付着して、石の裏面で藻類を捕食しながらゆっくりと匍匐します。成虫はこの幼虫の形からは全く想像できないコガネムシのようなコウチュウに変体します。本種は水質指標生物でもあり、少しきたない水域のスコア値8とされています(スコア値は1～10の10段階で、10ほど清潔な水域の指標になる)。淀川では三川合流付近や宇治川、桂川、木津川、支流の安威川や芥川などに生息しています。幼虫は体が平たく、水の抵抗を受けにくいので、タモ網でガサガサしても、簡単には石から剥がれません。石を拾い上げて、石の裏面を探すと見



ヒラタドロムシの幼虫



ヒラタドロムシの成虫

つけることができます。また、春～秋は幼虫と一緒に成虫も採集することができます。この貝のような平たい円盤状の幼虫、幼虫からは想像できない成虫をぜひ見つけて観察してみてください!

the worst 100

侵略的外来生物 淀川ワースト100

特定外来生物
AN INVADER

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



法律で規制されていること



特定外来生物とは人間の活動によって外国から持ち込まれたもの。とくに生態系や農林業、私たちの生活に大きな影響を与えるものが指定されている。むやみに日本に入れない、外来種のペットを捨てない、他の地域に広げないことが大切である。だが、外来生物には罪はない。先にも述べたが、人間によって運ばれてきたものであり、自らの意思で日本へ移動してきたわけではない。逆の立場で考えれば、被害者とも言える。だからこそ、駆除する際には必ずひとつの命として捉えたいものである。そして、駆除するだけでなく、今後は駆除個体を利活用することを考えるべきである。